

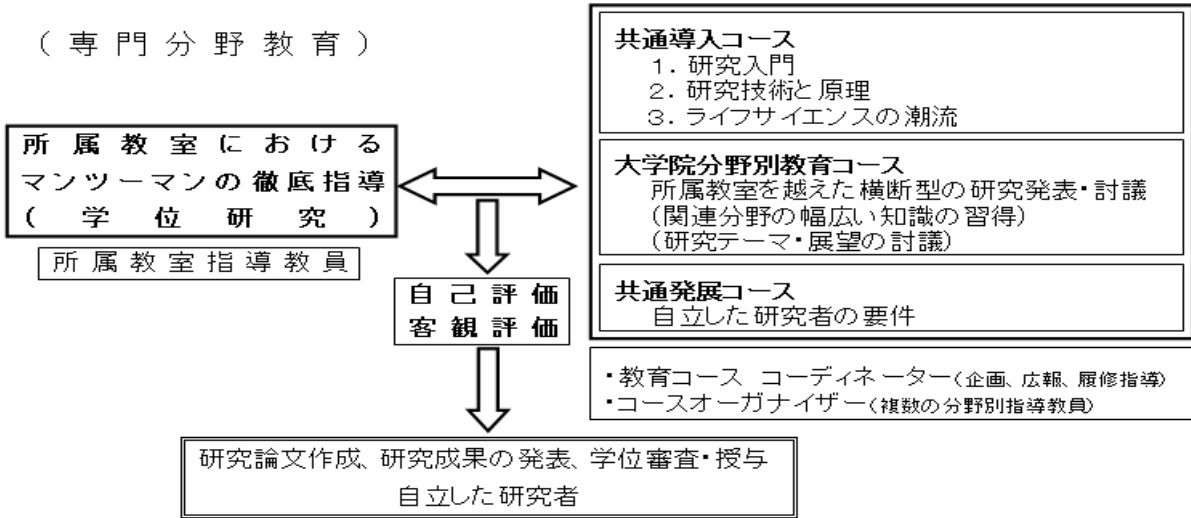
教育プログラムの概要及び採択理由

| | | | |
|---|----------------------|---------|-----|
| 機 関 名 | 京都大学 | 申請分野(系) | 医療系 |
| 教育プログラムの名称 | 共通・分野別教育統合による医学研究者育成 | | |
| 主たる研究科・専攻名 | 医学研究科医学専攻 | | |
| (他の大学と共同申請する場合の大学名、研究科専攻名) | | | |
| 取 組 実 施 担 当 者 | (代表者) 成宮 周 | | |
| <p>[教育プログラムの概要] 京都大学医学研究科では、「魅力ある大学院教育イニシアティブ」に採択されたプログラムに基づいて、平成17年度より、細胞生物学、神経科学、アレルギー・免疫など研究分野に応じた12の大学院教育コースを設置し、各コースで月例のコースミーティング、年1から2回の合宿を行い、所属教室、基礎臨床の区別を超えた横断型の研究発表・検討会を行ってきた。2007年5月1日現在、大学院生533名(のべ717名)、教員256名(のべ425名)がいずれかの教育コースに登録し、コースワークに参加している。2年経過し、同一分野の大学院生と教員が所属教室を超えてより密接に結びつき、従来の大学院教育では飽き足らなかった学生に本コースの意義が伝わり、たこつぼ教育からの意識脱却が進んだ。また、教室間の共同研究の芽生えと研究目的と実験データについての相互点検の意識が育ってきた。また、ミーティングの運営、プレゼンテーション技術の向上等の成果が挙ってきている。</p> <p>一方、このような専門別のコースを施行することによって、各コースに共通の大学院教育が必要であることも明らかになった。本プログラムでは、これまで行ってきた大学院教育コースに加え、ここで必要性が明らかになった共通教育プログラムを導入し、両者を統合することにより医学研究者の育成を計ろうとするものである。共通教育プログラムには、1回生を対象とした<u>導入コース</u>と2回生を対象とした<u>発展コース</u>があり、<u>導入コース</u>は、① 研究入門、②技術原理セミナーとトレーニング、③シリーズ・レクチャー『ライフサイエンスの潮流』の3つより成る。①では実験ノートの書き方、実験データの管理、実験計画の立て方、研究倫理など大学院で研究を始めるにあたっての基本的な技能、②では、研究技術を原理とともに学ぶ。②の趣旨は、単なる機器使用の習得を目指すのではなく、「その実験手法、機器がどのように開発され、進展してきたのか」を成り立ちから学ぶことにある。これにより、現今の分子生物学などで見られるキット実験万能の矯正を行う。ここでは、7つの主たる基本的実験手法(顕微鏡技術、細胞取り扱い技術、生化学実験技術、バイオインフォマティクス、形態学技術、動物実験技術、医学生物統計学)を対象とするが、具体的な実習は、医学研究科の最新鋭の共通機器と既存のリソースを中央管理して行う。また、③では、サイエンスを点ではなく流れとして捉えることを学ばせ、今後行う自分の研究の歴史的な位置づけを考える能力を修得させる。また、共通教育プログラムの<u>発展コース</u>では、自立した研究者の要件(申請書の書き方、プレゼンテーション技術、論文作成、知財一般、国際コミュニケーション)を修得させる。履修プロセスの概念図にあるように、これらの共通教育プログラムを大学院教育コースに結合させ、これらのコースワークと所属研究室でのマンツーマンの徹底指導とを融合させることにより、専門分野での卓越した研究能力に加えライフサイエンス全体に対する幅広い知識と技能を持ち、自らの独創的分野を開拓できる国際的な人材を育成することを期す。</p> | | | |

履修プロセスの概念図（履修指導及び研究指導のプロセスについて全体像と特徴がわかるように図示してください。）

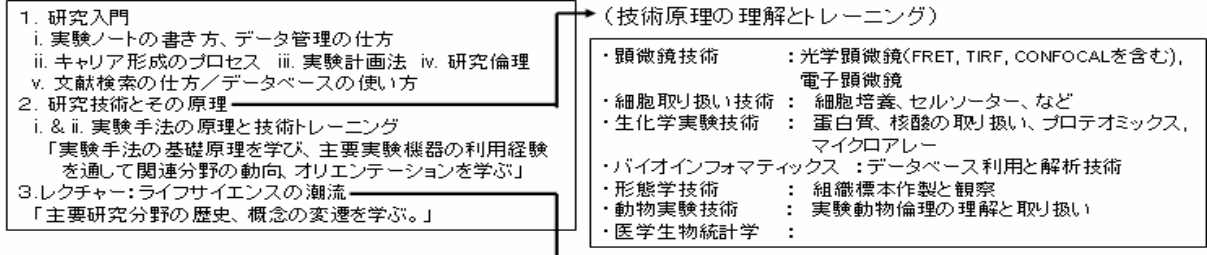
京都大学医学研究科における履修プロセス

（教育コース）

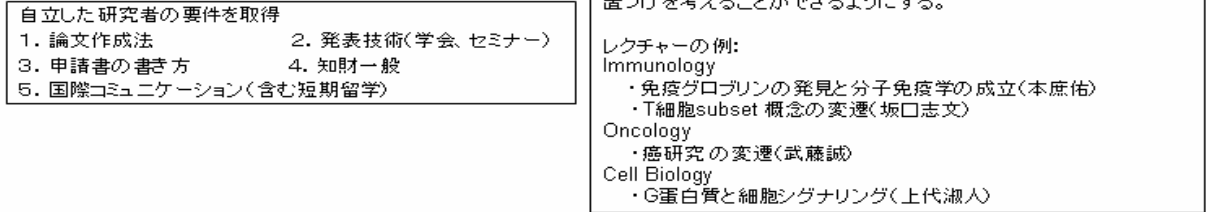


共通導入コース・共通発展コースの内容

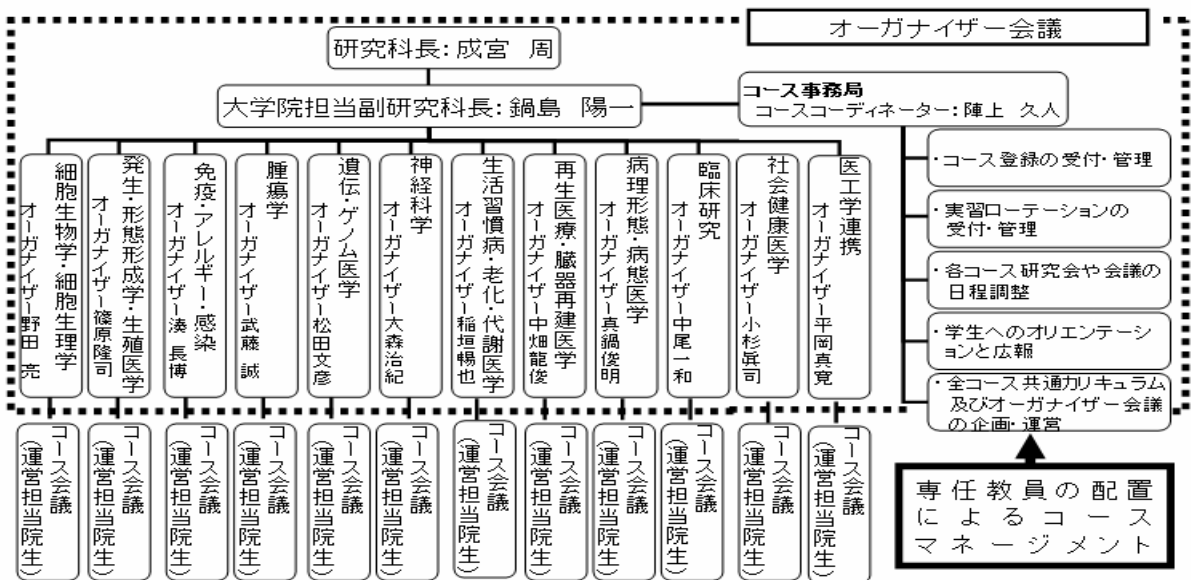
共通導入コース（1回生対象）



共通発展コース（2回生対象）



大学院分野別教育コース運営の組織図



<採択理由>

大学院教育の実質化の面では、先行する「横断型・系統的医学研究キャリアパス形成」の実績から、一層の実質化を推進するため、分野を統合した共通教育の必要性を認識して改善と発展を目指している点が優れている。新たに「国際的に強力なリーダーシップを発揮しうる優秀な医学研究者・医療専門家」を育成するという、明確な人材養成目的としている。これを実現するため、専攻の統合を図り、12の大学院教育コースを設置し、教育研究を組織的に推進する体制が既に整備され、大学院生・教員の従来からの蛸壺教育に対する意識改革も進められており、着実に成果を上げていることも実質化の実現性を高いものになっている。また、他大学から大学院生を積極的に受け入れるための方策と、受け入れ後の教育システムにも工夫が見られる。

教育プログラムについては、これまでの実施状況による課題を踏まえ、大学院教育コースの更なる充実を図るため、国際コミュニケーション能力の向上などを含めた自立した研究者に必要な共通教育プログラム（共通導入および共通発展コース）が提案されており、これまでの個別指導と相まって大きな成果が期待できる。また、プログラムは大学院生全体を対象としており、大学院課程の体系全体を視野に入れている点も優れている。